大原焼プロジェクト
Ohara-yaki Project

大原焼の歴史年表

B.C.			備中南部の土器
4000	縄文	縄文土器	□マキサヤ遺跡（里庄町新庄） 縄文土器や弥生土器出土
	弥生	弥生土器	
	古墳	土師器　須恵器	
	飛鳥		
	奈良		□沖の店遺跡（浅口市鴨方町）（12 世紀後半～13 世紀前半） 土師器が焼かれる
	平安		
1200	鎌倉		□亀山焼（倉敷市玉島）（12 世紀後半～15 世紀前半） 須恵器系が焼かれる
1300	南北朝	瓦質土器	
1400	室町		
1500	戦国 安土桃山	◆大原焼の起源	◆大原で土器が焼かれる（15 世紀後半）
1600	江戸	◆里見山中遺跡	◆里見山中遺跡（里庄町里見大原東）から鍋・擂鉢・内耳鍋等の瓦質土器が出土（17 世紀前半）
1699	元禄 12	◆記年銘最古の大原焼	◆宝殿（祠）の屋根に元禄十二年十二月十九日の銘
1706	宝永 3	◇山神社の社殿改築	◇大山祇神を勧請し、大原全体の崇敬神社となる
1739	元文 4	◆砂鍋が村の産業 ◇陶舎相連幾窯烟・・1790 年頃（寛政 2）	◆砂鍋（ﾎｳﾛｸ）が『備陽国志』に口林村の産業として載る ◇鴨方の西山拙斎が大原焼の盛んな情景を「陶舎が連なり、幾つもの窯から煙が立ち上る・」と漢詩に詠む
1830	文政 13	◇宮地八幡宮唐獅子献納	◇妹尾勘次郎作　里庄町指定文化財（里庄町新庄宮地）
1868	明治元	○明治維新	○規制が緩和　船行人の持ち船が一気に増加
1869	明治 2	◆大原焼の販路	◆流通の範囲は備前、備中、安芸、周防、長門、伊豫、阿波、讃岐、播磨、摂津が「浅口郡口林村大原炮碌商他所行願」に載る
1878	明治 11	◆大原焼の呼称初出	◆「大原焼」の呼称が岡山県師範学校蔵版『岡山県地誌略二備中ノ部』にはじめて記載
1886	明治 19	◇大原焼の工人数と窯	◇里見村には「工人 350 余名、窯 11ヶ所あり」と農務局編纂『府県陶器沿革陶工伝統誌』に載る
		◆大原焼の器種	◆器種はほうろく、土釜、土瓶、土鍋、火鉢、かまど弁柄るつぼ、はぜ壺、擂鉢、置物、奉納物、宝殿、縁起物や玩具など多種多様な製品が作られる
1907	明治 40	◇大原焼の出荷高	◇出荷高は『岡山県統計年報』に 3850 円。同年の里庄村の予算 5381 円、村予算の 7 割強に当たる
		◆大原焼の最盛期	◆最盛期は明治後期から大正中期頃、町の主要産業の 1 つ
1911	明治 44	◇不動院五重塔建立	◇妹尾石平作の供養塔（五重塔／高さ 4m）を不動院に（里庄町新庄）建立
1912	大正元		
1916	大正 5	◇湯沸かしを天皇献上	◇小野筆三郎作の湯沸かしを大正天皇に献上する
1920	大正 9	○国鉄里庄駅開設	○旅客・貨物の取扱開始　陸送が増え、船送が減る
1926	昭和元	◆大原焼の需要漸減	◆昭和になり生活様式が近代化するつれ需要漸減
1945	昭和 20	○終戦	
		◆大原焼の需要増加	◆終戦直後は需要増大　大原焼関係戸数 55 戸に増加
1953	昭和 28	◇大原焼と民芸運動	◇柳宗悦・バーナードリーチ・浜田庄司等　来窯
1955	昭和 30	○高度経済成長始まる	
		◆大原焼の需要激減	◆燃料が薪から LP ガスへ代わり、高度経済成長が進行するにつれ大原焼の需要も激減する
1970	昭和 45	◇新しい大原焼の模索	◇焼締陶への転換を図る
1985	昭和 60	◆伝統的大原焼終焉	◆伝統的大原焼は終焉を迎える
1993	平成元	○バブル崩壊	○新しい大原焼も衰退していく

マキサヤ遺跡出土
縄文土器

マキサヤ遺跡出土
弥生土器

里見山中遺跡出土
瓦質土器

元禄12 年銘
「宝殿」

ほうろく

五重塔（不動院）

湯沸かし

土釜

貯金箱

二連くど（かまど）

焼締陶　壺

はぜ壺

茶釜